TENOHASI

てのはし
地球と隣のはっぴい空間・池袋
会報誌第39号　2019年6月15日発行

６月８日の炊き出しにて　Photo　Kazuo Koishi

p １ ・・TENOHASIニュース　クラウドファンディング成功、越冬報告、他
p ３ ・・NHK　Eテレ　ハートネットＴＶ　「ハウジングファーストという考え方」
p ８ ・・ハートネットＴＶ 出演者にインタビュー
p ９ ・・クラウドファンディングチーム　大反省会
p11 ・・当事者インタビュー
「学べば学ぶほど感じる人生の悲哀と義憤」 Fさん
p19 ・・支援者インタビュー
「その人らしさを取り戻していくために必要なのは安心して一息つける場所。
『あの人が悪い』という偏見を越えて」 TENOHASI事務局長 清野賢司
p22 ・・物資のカンパありがとうございました！＊ＷＥＢ版では氏名は削除
p23 ・・会報誌ｗｅｂ版のお知らせ/TENOHASIの活動

The Earth and Neighbor Of HAppy Space Ikebukuro

TENOHASIニュース

○「完全個室型シェルターを守りたい！」クラウドファンディング成功！

助成金が切れた TENOHASI の財政危機を救い、シェルター維持費をまかなうために、この年末年始に初めてクラウドファンディングに取り組んでみました。そもそも「クラウドファンディングってどうやってやるの？」と何もわからないところから始めて「スタートダッシュが大事」「活動報告はこまめに」などのノウハウも始めてから知ったことです。

目標は「強気に１００万円」としましたが、「正直、TENOHASI の知名度では５０万がいいところ？」と危ぶんでいました。ところが終わってみると１３２件のご寄付をいただいてまさかの合計１１６万円。本当にありがとうございます。

おかげさまで２０１８年度は赤字を回避でき、今年度も活動を継続出来ます。本当にありがとうございました。　　＊９ページの「スタッフ大反省会」もぜひご覧下さい。

○越年越冬活動　無事終了しました

「少しでも暖かい年越し」をめざし、この年末年始も１２月３０日から１月２日まで４日連続の炊き出しと医療相談生活相談を中心とする「越年越冬活動」を行いました。炊き出しはボランティアが心を込めて工夫して、親子丼・年越しそば・雑煮・鮭の粕汁をと毎日味を変えて提供しました。また、毎年恒例の甘酒（立教大学大学院２１世紀デザイン学科石川治江ゼミ提供）に長蛇の列ができました。炊き出しに並んだ方は前年とほぼ同じで、１３９人（３０日）～１８０人（元日）。参加ボランティアは２９人(元日）～５８人（２日)。医療相談は延べ８１人、生活相談は１１人で、休み明けに５人の生活保護・自立支援センター申請に同行支援しました。

○「東京アンブレラ基金」クラウドファンディングも成功！

『今夜、行き場のない人』が緊急に宿泊するための資金を、難民・原発避難者・女子高生・ＬＧＢＴ・子ども・人身売買の被害者などの支援に取り組む団体と共同で募った「東京アンブレラ基金」は当初の目標１００万円から大きく伸ばして６００万円（２０００泊分）に迫る勢いです（６月１５日で募集終了)。さっそく１０連休前の炊き出しで出会った方３人に連休明けの生活保護申請までのつなぎとしてとりあえず４泊分のネカフェ代をお渡しして「本当に助かった」と感謝の言葉を頂きました。

○テレビ・ラジオ・新聞の取材と演劇も・・

この冬から春にかけて、今まで経験したことがないくらい各種の取材が相次ぎました。

・**ＴＢＳラジオ１２月２８日「荒川強啓デイキャッチ」、１月１２日「蓮見孝之まとめて！土曜日」**
ＴＢＳラジオ崎山記者が TENOHASI のクラウドファンディングを２回にわたって取り上げてくれました。

・**ＮＨＫ　Ｅテレ　1月４日　あしたも晴れ！人生レシピ「幸せのタネは夫婦の中に」**
夜回りで配るパンを作っている「あさやけベーカリー」の店主・山田和夫さんと TENOHASI の夜回りが放送されました。子ども食堂のことは「２４時間テレビ」を始めとして今まで何回もマスコミで取り上げられてきましたが、山田さんが子ども食堂を始めるきっかけにもなったパン作りが取り上げられたのは嬉しかったです。

・**しんぶん赤旗　１月１３日　日曜版「年越し派遣村１０年」**
派遣村から１０年のこの冬も越冬活動が必要な現状を、TENOHASI 越冬中の生活相談にいらした若い路上生活者の声を中心にレポートしてくれました。

・**ジャパンタイムズ　３月２日　日曜版”No one wants be homeless"**
東京のホームレス問題が３ページにわたって掲載され、TENOHASI と山友会の活動が紹介されました。ボランティアの亀田さんが写真入りで登場。

・**青年劇場　「つながりのレシピ」　（４月５日～１４日　紀伊國屋サザンシアター）**
あさやけベーカリーの山田さんと TENOHASI の元ホームレスメンバーが共にパンを焼くようになったドラマを、伝統ある劇団・青年劇場が芝居にしてくれました。笑って泣いて、「順調に問題だらけ」の中から新しいつながりが出来る楽しさを味わえるいいお芝居でした。

・**ＮＨＫ　Ｅテレ　４月９日　ハートネットＴＶ「ハウジングファーストという考え方」。**
３０分番組丸々一本でハウジングファースト東京プロジェクトの実践を紹介してもらいました。放送内容の抜粋を３ページ以降に載せています。炊き出し調理場で行っているレクチャータイムではＤＶＤを見てもらっていますので、ぜひご参加下さい。

・**毎日新聞　４月１８日夕刊「特集ワイド・貧困の現場を歩く」**
TENOHASI の活動とあさやけベーカリーのことがほぼ１面を使って取り上げられました。

・**毎日新聞　５月４日朝刊「アクセス・改元祝賀関係なし・困窮者、おにぎりに列」**
１０連休中も行った TENOHASI の夜回りの様子が詳細に取り上げられました。

ＮＨＫ　Ｅテレ　ハートネットＴＶ
【特集】東京“ホームレス”第２回
「ハウジングファーストという考え方」

放送日：2019年4月9日

写真はハートネットＴＶ　ＷＥＢサイトより https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/204/

ＮＨＫ・Ｅテレの「ハートネットＴＶ」で「東京“ホームレス”」が３回シリーズで放送され、２回目の「ハウジングファーストという考え方」でハウジングファースト東京プロジェクトの活動が取り上げられました。いままでニュース等でスポット的に報道されることはあったのですが、これだけしっかりテレビに取り上げられるのは初めてです。

見逃した方も多いと思いますので放送内容を抜粋して掲載します（文責　清野賢司）。

オリンピック・パラリンピックに向け、再開発が進む東京。その影で“ホームレス”の人たちを取り巻く環境が厳しさを増しているのではないか、と懸念されています。民間の調査が明らかにした「居場所の減少」。さらに、精神疾患や障害のある人などが、支援からこぼれ落ちている実態もみえてきました。そこで今、注目されているのが「ハウジングファースト」という考え方。その取り組みを紹介します。

これまでのホームレス支援は、まず集団生活の施設に入り、就労支援などを受けて自立していくというものが中心でした。ところが、それではうまくいかず、再び路上に戻る人が少なくないこともわかってきました。

このようななか、民間による「ハウジングファースト」という新しい取り組みが始まっています。集団施設を経ず、路上からすぐにアパートなどの個室を提供するというものです。

７つの団体が連携して取り組んでいる「ハウジングファースト東京プロジェクト」。ある日、支援者の一人であるＮＰＯ法人ＴＥＮＯＨＡＳＩの清野賢司さんは、路上で出会った６６歳の山下さん（仮名）をアパートへと案内していました。

山下さんはこれまで役所に助けを求めて生活保護を受けましたが、集団生活が苦手で、施設に居続けられませんでした。施設と路上を２０回以上、行き来した末に、清野さんに出会ったのです。

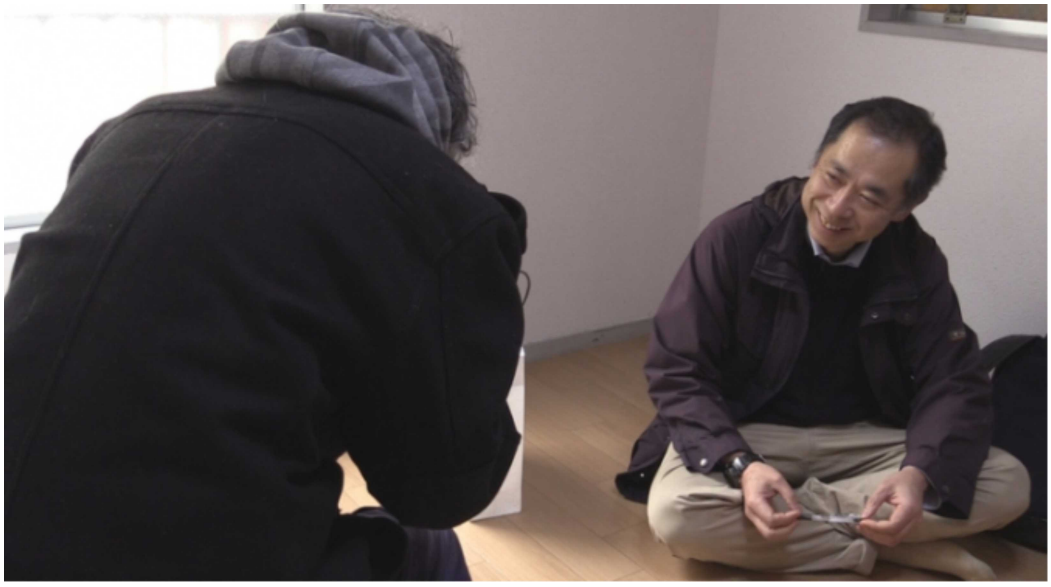
山下さん「膝も痛いですね」

清野「それじゃ炊き出しもあんまりいけないでしょ、遠くは」

山下さん「上野に行く」

清野「歩いて上野いったの？　片道４時間！　よくそんな足で野宿してましたよね」

清野さんが案内したのは、プロジェクトで借り上げているアパートです。プロジェクトでは、こうした物件を都内に３４部屋管理しています。



山下さん「最高ですね。路上、もう終わりたいですね」
清野「もう1回戻る気はない？」
山下さん「戻る気はない」

「部屋に入ってお風呂入って新しい服に着がえて、１時間後に見に行ったらもう昏々と寝てるんですよ。安心したんでしょうね。その前の週の炊き出しでは、寒さに震えながらご飯食べて、転んで顔を血だらけにしていたんです」（清野）

行政による支援では、多くの場合、まず集団施設に入り、自立できると判断された人だけが一人暮らしに移行します。しかし、途中で路上に戻るケースも少なくありません。

一方、ハウジングファーストでは、まず無条件で個室の住まいを提供。生活保護を申請し、数か月以内に自分で契約した家へ移ります。

「普通にプライバシーが保てて『これが自分の住まい』と思える空間。それが保障されて初めて、生きている実感、自分が尊重されている実感を得ることができる。だから次のステップに進める」（清野）

プロジェクトは7つの団体で連携して取り組んでいます。大切にするのは、「暮らし続けること」をいかにサポートするかです。

精神疾患のある人を訪問看護で支える、訪問看護ステーションＫＡＺＯＣの渡邊乾さん。この日は不安障害のある挽地（ひきち）さんを訪ねました。

渡邊さん「話したいこととか、話そうと思ってたことって、ありますか？」
挽地さん「ちゃんとできてます。生活もちゃんとできています」

かつて路上生活をしていた挽地さんは、アパートに暮らして５年になります。不安障害と知的障害があり、家計管理が苦手です。

挽地さん「前回５２５０円。これが下がった」
渡邊さん「水道代が下がった。すごいじゃないですか」

生活費をノートに記録してもらう挽地さん。うまくやりくりできているとわかると、安心できるのです。

「前向きに良くなっていくためには、絶対的に土台が必要だと考えています。その土台っていうのは、日常性だと思っているので。生活が本人の思うように、ちゃんと循環している、安定しているというのが、非常に大切」（渡邊さん）

これまでは自立が難しいとされた人でも、サポートがあれば一人暮らしができる。

プロジェクトが重視するのは、就労率などではなく、自分の暮らしを続けられるかという「住宅維持率」です。自立への支援

は、安定した暮らしを取り戻して初めて可能になるという考え方です。

挽地さんが机に置いてある鉢植えを見せてくれました。

ディレクター「バラですか」

挽地さん「はい、バラです。買ってきたばかり。今雨ザーザー降ってたからここに置いたけど、明日出します」

ハウジングファースト東京プロジェクトでは、支援を受けてアパートなどで暮らす人はおよそ１７０人。訪問看護の支援を受け、９割の人が生活を継続しているということです。

ＮＰＯ法人自立生活サポートセンターもやい理事長の大西連さんは、この取り組みを支援の視点を変える画期的なものとして高く評価します。

「どちらかというとこれまでの支援というのは、雨露をしのげればいい、野宿じゃないだけマシ、みたいな『生存さえ保てればいい』という支援が多かったのですが、この取り組みは、住まいは大前提で、安定した住まいを確保したうえで、そこからひとりひとりの支援を組み立てていくと。それはかなり画期的なことだと思うんです。生存を保つ、から、人間らしい生活をどうつくっていくかという視点の転換は非常に重要なことだと思います」

この「ハウジングファースト」という考え方は、欧米では「住まいは権利」として取り入れられているところもあるにもかかわらず、なぜ日本では実践されてこなかったのでしょうか。

日本福祉大学准教授・山田壮一郎さんはこう分析します。

「この社会が、ホームレスの人をどういう人として見ているのかという点に行き着くと思います。ホームレスというと、一般社会での生活ができない、したくない人と見てきたのではないか。だから、一般社会で生活できるように、就労とか人付き合いを訓練してからでないと、一般生活に移行させないというふうに制度が設計されていて、生活保護でもアパート生活へ移行する条件を非常に厳しくするような運用がされてきたのではないかと思います」

実際に、ホームレスの人が一人暮らしをするには審査があり、審査に時間がかかることや、行政の人手不足もその一因だと大西さんは指摘します。

「都内だと生活保護のケースワーカー一人が担当しているのが平均１２０世帯というと膨大な数で、ひとりひとりに医療や介護をどうしようとやっていると、どうしても元ホームレスの人を施設に入れっぱなしにして管理を任せてしまう。そうすると、支援の優先順位が下がっていく」

しかし、ホームレスになる人の背景が、従来考えられていた失業だけではなく、精神疾患や障害など多様化していることで、ニーズもさまざま。そうした多様な支援を、どのように提供していくかが課題になっています。

プロジェクトの支援を受けてアパートなどで暮らす人はこれまでおよそ１７０人。しかし、毎年２～３人が、支援の途中で失踪してしまう現実があります。

“居場所”から踏み出した新たな一歩

一度、アパートから失踪したものの、再び戻ってきた人もいます。

この日は、プロジェクトの医師が行う診察の日。２０年以上、路上生活をしてきた「なべさん」は、プロジェクトと出会った当初はてんかん・うつ病・高血圧を抱え心身ともに憔悴していました。

医師の西岡誠さんは、出会った時の様子をこう振り返ります。

「最初に会ったときと今とではもう別人ですね。まず痩せてました。げっそりしてて、今より１０キロは少なかったです。しかも最初会った時、車の中で倒れてたんですよね。ぐったりして。頭痛くて、血圧は２００超えで、大事な薬は、全部なくなってね」

路上生活からアパートに入ってから、なべさんに変化が現れました。自ら血圧を測って記録し、健康を意識し始めたのです。

「元々几帳面にきっちり出来る人だったんではないかと思います。今までの環境がひどすぎたんで自分の力を発揮できなかったんではないかと」（西岡さん）

しかし、一人暮らしは最初からうまくいったわけではありませんでした。初めての「自分のアパート」への引っ越しを済ませた数日後のこと。

「ガス開栓の立ち会いとか、電気、家賃の払い方とかどうしたらいいか全然分かんなくて。不安で不安で、家出しちゃったんです」（なべさん）

アパートを飛び出し、街を放浪したなべさん。スタッフからの電話で戻った時、ある言葉をかけられました。

「『場所が遠くても、距離が離れてても、みんないるから、心配しなくていいから』って。『もし、なんか不安なことあったら、誰でもいいから声をかけて』と。それまで考えたことがなかったんですが、『一人じゃないんだ。みんないるんだ』って思って。

それからはスタッフさんと一緒に銀行に行って、振り込みの手続きを後ろで見ててもらって、一人で出来るようになるまで教えてもらいました」（なべさん）

家での暮らしを取り戻して４年。なべさんは今、新たな一歩を踏み出しています。

プロジェクトに協力している地域のパン屋で、ボランティアを始めたのです。焼くのは、今、路上で寝泊まりする人に配るパン。週１回、スタッフとともに夜回りに参加し、一人一人に手渡ししています。

「なんとか自分も、ここまで来られたんだから、なんかやってあげたいなって。

これは昨日の話なんですけど、（路上で）出会った人が、『どっかいい施設ないですかね』って言ってきたんですよ。ご本人から。ＴＥＮＯＨＡＳＩのスタッフさんにつなげて、『そこでいいですか』って言ったら、『はい』って言って。だから自分も嬉しくってね、『良かったですね』って言って。自分もそうだったから」（なべさん）

アパートに入る前、自分は孤独だったとなべさんは言います。

「アパートに入ったから終わりではなくて、アパートからが本当の出発点。居場所があるって

いうのは本当にいいなあって。前はなかったですからね。本当に。孤独でした。

パン作りに行くじゃないですか。自分が頼りにされているっていうの、すごいなあってね。自分で焼いているんですからね。ははははは」（なべさん）

ホームレスの人の住まいは社会全体の問題

これらの取り組みについて、大西さんは、次のように話します。

「なべさん、いい笑顔でしたね。

貧困とか生活困窮の問題を考える時に、経済的な貧困と、つながりの貧困・関係性の貧困とかいろんな言い方があるんですが、いわゆる孤立の問題、その２つがセットだと考えています。

これまでの支援は『経済的に自立しよう』みたいなのが中心だったんですけど、ハウジングファーストは、まず住まいを安定させて、生活の支援をすると同時に、居場所や人と人のつながりを、与える与えられるじゃなくて一緒に考えながら、丁寧に丁寧につないでいく。そこに特徴があって、希望があると思いました」

一方で、多様なニーズに応えていくためには、公的な支援の仕組みが必要だと訴えます。

「一人一人のニーズ、課題、困難を一つの団体・ネットワーク・地域だけで支えるというのは、難しさはあります。それをどうやったら解決するのか。確かに居場所があれば、そこが居心地が良い人もいるんですけど、そこでトラブルになって、あの人が一緒だと嫌だとなって行かなくなってしまうと、また孤立してしまう。でもそういう居場所が地域のなかにたくさんあれば、一か所がダメでも他のところに行ける。そういうつながりをたくさん作るような活動や地域の資源が必要で、しかもそれをＮＰＯ・民間だけではなくて、公的な仕組みや行政が支援をして、作っていくことが必要だと思います」

現在、国も、ホームレス状態の人に住まいをどう提供していくか、生活をどう支えていくかについて検討を行っています。国の検討会にも参加する山田壮志郎さんは言います。

「現在、国の検討会では、無料低額宿泊所というホームレスの人たちを受け入れてきた施設のあり方が検討されています。無料低額宿泊所のなかには、貧困ビジネスと呼ばれるような劣悪な施設があって、規制を強めていこうというのが一つ。もう一つは、『地域生活が難しい人』たちに、良質なケアを提供する施設を育てていこうという趣旨になっています。

その一方で、『地域生活が難しい人』というのが、どういう人かというのを考える必要があると思っています。今、社会福祉は認知症や重度の障害がある人でもできるだけ地域で生活できるように支えていこうという流れです。だれでも、さまざまな支援を受けながら地域生活を持続させていくという発想が必要なのではないかと思っています」

“ホームレス”の人の生活や住まいを考えることは、社会の「セーフティネット」を考えること。地域でみなが一緒に暮らしていくために、ＮＰＯや行政任せにするのではなく、一人一人が一緒に考えていく姿勢が大切なのです。

「ハートネットＴＶ」出演者にインタビュー！！

①挽地さん

Ｑ　家にテレビカメラが来てどうでしたか。緊張しましたか？

Ａ　緊張はしないです。よかったです。渡辺さんと率直にお話しできて。

Ｑ　挽地さんだけ本名が画面に出てましたが、大丈夫でしたか？

Ａ　はい、大丈夫です。

Ｑ　最近はどんな暮らしですか？

Ａ　自炊もしてて、作業所も行ってます。夜は睡眠が取れています。

Ｑ　番組でバラの話をされていましたが、バラが好きなんですか？

Ａ　はい、バラは大好き。毎日ベランダで水をやっています。今年買ったバラは花が終わったら別の大きな鉢に植え替えます。訪問看護の人に手伝ってもらって。去年の薔薇も咲きました。

Ｑ　挽地さんはどうやって池袋に来たんでしたっけ？

Ａ　出会いは8年前の越冬炊き出しです。中村あずささんと森川さんと出会って、ふぁみりあ（当時運営していたシェルター）に入りました。山北さんにアルコール止めた方がいいよと言われました。

Ｑ　それまではどこに？

Ａ　池袋駅のビックリガードや新宿の戸山公園で寝てました。

Ｑ　生活は変わりましたか？

Ａ　はい。前は炊き出しに並んでご飯をもらってたけど、今度は配る方に回って。やっぱり相手のことを考えて一声掛ける。炊き出しの日は世界の医療団の荷物（医療相談の機材）の積み込みをします。帰りは下ろして、ゴミの分別。ありがたさがしみじみわかります。

Ｑ　テレビに出てどうでしたか？

Ａ　はい、テレビに出て楽しかった。また出ます。

②なべさん

「NHKの人が自宅に来た時、KAZOCの渡辺さんが雨の中来てくれて撮影したんです。カメラや音声さんが部屋に来たのが初めてで。緊張したのかなかなか会話できなかったし、血圧測定したら、いつもは120なのにいきなり160でした(笑)。

その日は自分のアパートで2時間くらい撮影しました。

その後にあさやけのパン作りを撮影して、インタビュー。路上生活の経緯を話しました。

話してみて改めて思ったんですけど、自分、TENOHASIに出会えなければここまで来れなかったし、ここまで来られたのが自分でも信じられない。

１人暮らし3年目です。まさか自分が全国ネットのテレビに映るとは思わなかったです。

インタビュー？緊張しました。質問されたので答えたんですが、カメラが回っているから意識して、なかなか思い通りに話しができなくて。

番組を見て、正直、『ああ自分が映っている』って思って、手で顔を覆ってしまいました。

昔は痩せてたのに何でこんな太ってるんだと。体重が10キロも増えたというのはどういうことかと。

前の写真と比べると全然違いますね。（昔の写真と見比べて）ああ、4年前と比べると別人ですね・・・・」

NHKハートネット
福祉情報総合サイト

クラウドファンディングチーム大反省会

4月27日（土）、炊き出し調理中に抜け出して実施

TENOHASIクラウドファンディングチーム
堀田聡美　（IT専門家）
中村さとみ（大手人材会社勤務）
清野賢司　（事務局長）

中村　最初はどうなるかと思いましたが、目標金額をクリア出来てよかったです。

堀田　確かに金額では成功です。それはとっても大切なことです。とはいえ、「たとえ金額でをクリア出来なくてもこれが出来たら成功」という定義を最初にしたと思うんですが、清野さん、覚えてます？

清野　（呆然）

中村　ファンを増やす・・・

清野　あ、そういえば・・

堀田　清野さん途中からそれを忘れて、メールの内容が完全に「金金金金！」になってましたよね。「清野さんおっかねー」みたいな(笑)

中村　ナイス！

堀田　このオヤジギャグを喜んでくれるのはさとみさんだけ(笑)。会社では冷たーい目であしらわれます。

清野　堀田さんオヤジ～。でも冷たい目線も嫌いじゃなかったりして。

中村　あ、絶対そうでしょ。

堀田　相手による。好きな人から見られたら見つめ返すけど、どうでもいい人に見つめられても困るじゃないですか(笑)。

　清野さんも似たところありますよね。もっといじって、みたいな。

清野　Mの血が騒ぎます(ドヤ)！

堀田　…話を戻しますと、今回のテーマは「ファンを増やそう」。ファンというのは、

　①活動に参加するボランティア

　②金銭的な寄付者

　③物資の寄付者

の3種類。特に金銭的寄付は1回だけなくて継続的に寄付してくれるにマンスリーサポーターを増やしたいと言うことが大きな目標としてあった。これは増えましたか？そして新規のファンがどれだけ増えたか、このあたりはどうでしょうね。

清野・中村　おー、すごーい（拍手）

堀田　清野さん関心があるのはお金だけだから(笑)

清野　あのう、それはどうやって検証すればいいですか？

堀田　クラウドファンディングをきっかけに新たに来たボランティアや寄付者の数ですね。

中村　ボランティアは分析が難しいんですが、クラウドファンディングに寄付して下さった方のコメントを分析すると、「こういうことをされているんですね、初めて知りました」みたいにTENOHASIを初めての知った方が4割くらいで、残り6割はTENOHASIを前から知っていて清野さんの呼びかけで寄付してくれた方。

　Facebookでも多くの方々が拡散してくださり、感動しました。清野さんの人望ですね。

堀田　人望(笑)。それは価値判断が入るから、人脈にしておきましょうか。

清野　いやいや、人望ということでいいじゃないですか(笑)。

　たしかに、前からTENOHASIを知って応援してくれていたけど、資金の寄付まではしていないというような人が、クラウドファンディングをきっかけに「こういうところにお金が足りないのか」とわかって寄付してくれたというケースがかなりありました。

中村　「10年ぶりです」という方もいましたね(笑)。

清野　そうそう、「ずっと気にはしていたんですけどね」みたいな。その意味ではクラウドファンディングでボーンと花火が打ち上がったような効果があったと思います。

堀田　前から知っていた方の中で、継続的に寄付してくれていた方と、そうでない方はだいたいどのくらいの割合？

清野　うーん、これも難しいです。実は、前から寄付してくれていた方で、「クラウドファンディングだと手数料とられちゃうから、ゆうちょ銀行やクレジットカードで振り込みますね」と言ってくれた方が結構いるんです。そういう寄付がクラウドファンディングに匹敵するくらいの額があったと思います。振り込むのが面倒だからと現金を手渡ししてくれたのもかなりありました。

堀田　では、ＴＥＮＯＨＡＳＩの財政事情を知ってもらえた、新しいファンが増えたという意味では、成果があったと言えますね。集まった金額よりも多くの広告効果があったでしょう。

　マスコミも結構取材して下さったじゃないですか。ＴＢＳラジオの崎山さんが２回も取り上げてくれたり。それは、こちらがお金を払ってもいいくらいの価値だと思います。

清野　そうそう、あれからいろいろな所からの取材が増えました。ＮＨＫや毎日新聞や・・今度ドイツのテレビが来ます。

堀田　最高ですね♪あと、「新規のファンが増えた」という観点では、FacebookやTwitterのフォロワーが増えたというのも指標になります。次回やる際は、この辺のbefore/afterもカウントしておきたいですね。

中村　今回、支援をしてくださった方の中で、ＴＥＮＯＨＡＳＩのメーリングリストの登録希望者が２０人くらいいました。少なくともこの人数はファンが増えましたね。

堀田　活動を、継続的に知ってもらうという意味では、すごく良いことですよね。

　時間もないので、次の話にいきますね。一番最初に清野さんにお話ししていたことの中に、「クラウドファンディングに関わる人を増やそう」というのもあったはずなんです。覚えてます？

清野　そうでしたよねぇ（目が泳いでいる）。

　でも、中心スタッフがあんまり多いと「船頭多くして・・」になりません？

堀田　いや、単純にクラウドファンディングをすることを「自分事」と思う人を増やすということです。広報チラシを配ってくれる人、寄付者へのコメント返しとかしてくれる人、色々な方が「こんな情報をクラウドファンディングの活動報告に入れたい」と、情報を提供してくれたり。みんなでもっといろいろなことを分担してやりたいと伝えたつもりだったんですが、今回はそれがうまく動いていなかったようで（苦笑）。

中村　今までのことをやりつつ、それをクラウドファンディングの活動に反映させていこうと。

清野　何となく思い出してきました（汗）。

　たしかに、今回は、ハウジングファーストをメインにしたのですから、生活相談スタッフや、シェルターに入っている人から発信するチャンネルがあったらよかったかもしれない。

堀田　ただ、今回は初めてのクラウドファンディングですから、清野さんが「クラウドファンディングってこんなものでこういう工程が必要なんだ」とだいたいわかった。それだけでもよかったかなと。

　だから今回は、初期目標の点でも、成功の部類だと思います。次はもっとたくさんの人に関わってもらって盛り上げたいですね。今日の話を会報誌にも載せて、呼びかけておいて下さい。

中村　参加したい人は絶対いるので。「１０年ぶりですけどやります！」みたいな(笑)

清野　頑張りまーす！（笑）

　と言うことで、2019年度のクラウドファンディングにスタッフとして参加してくれるボランティアスタッフを大募集。
いまTENOHASIに参加している人・参加したことないけどこれからクラウドファンディングにチャレンジしてみたい人の両方を募集します。興味とやる気のある方はTENOHASIのサイトのお問い合わせフォームからご連絡ください。

学べば学ぶほど感じる人生の悲哀と義憤

Ｆさんは今年７１歳。約５年間の路上生活から生活保護を申請し、現在ＴＥＮＯＨＡＳＩの完全個室型シェルターを利用中です。波乱の人生と、生活保護を申請した先に経験したへの義憤を熱く語って下さいました。

出身はどちらですか。

大阪です。僕が生まれたのは昭和２３年で、戦争が終わってまだ３年。中国人や朝鮮人とヤクザもんが対立して、拳銃を打ち合うバンバンという音が聞こえるような時代でした。

オヤジは商売をやっていて、最初はうまくいったもんですから結構大きな家を建てたんです。ところが商売が傾いてきて借金がかさんだんで、最初、家を半分に割って売って、もうさらに半分ぐらいに割って、４世帯も５世帯も住むような感じになってね。そうこうしてる間に、親父は死んじゃったんですよ。僕が中学校を卒業する頃に。しょうが無いから隣町のアパートに引っ越しました。僕は長男で、下に妹や弟もいたんで、夜間高校行きながら新聞配達や牛乳配達をしました。成績は悪くなかったんですが、貧乏な家庭ですから大学に行く感じじゃなくて。

そうですか、では高卒ですか？

いや、高校中退です。その後、職業訓練学校に行って、自動車の修理とか板金屋さんの仕事に就いたんですけど。汚れたりするのが嫌でね、それからいろいろな会社で働きました。

何が一番長かったですか？業種で言うと。

住宅リフォームの営業ですね。最初は下っ端だったんですが、途中で仲間と一緒に独立して。

例えば、一戸建て住宅は建てて１５年くらいたったら塗装をやり直しますよね。足場を組んで、きれいに水洗いして、下塗り、二度塗りとやっていくんですが、大手の会社が受注しても実際に施工するのは下請けの会社で、その時点でもう３～４割は大手にはねられているわけですよ。だから、そういうお客さんに「大手の会社が１４０万ぐらいでやっている仕事を、自分たちがやると９０万ぐらいでできますよ」って丁寧に説明するんです。

「私たちは小さな会社だけど、仕事は何十年もやってきた職人ばっかりが集まってて、塗料１つとっても、関西ペイントであろうと東洋ペイントであろうと、みんな大手と同じ材料を使うんです。洗浄をするにしても塗装するにしてもやり方は全部同じですよ。同じ仕事をして、同じように仕上げて、それでこんだけ値段が違うというの、日本の国って面白いと思いませんか」って。そうやって、細かいことまで説明したらお客さんから

「建てたところへ頼んだら１４０万ぐらいの見積もりがきた。お宅は、どれぐらいでやっても

らえますか」って聞いてくれるんです。そしたら見積もりを出して、職人を紹介して「責任持ってやらせますよ」って。そうやって言うと信頼してくれますよね。

とっても説得力ありました、今。

だから、すごい注文取れた時期があったんですよ。その頃、大手の住宅メーカーっていうのは、車を売るのと同じように、どんどん作って売るだけで後はほったらかしのところがいっぱいあったんです。そうすると、どんな家でも、１０～２０年たてば外装関係の傷みが出てきて。そういうときに、もう、入れ食いに近いぐらい、すごい利益上がったときありました。それがダメになったのは、やっぱりバブル崩壊ですね。あっという間に傾いて終わりました。

その頃は結婚されてたんですか。

そうですね、結婚は２回しました。同棲も２回くらいありました。でも、その度に、自分の甲斐性のなさというので振られたんでしょうね。

でも、振られてもまた次があるということは、羨ましゅうございます。

寂しいから、そうやって、また次、次って求めていくんでしょうけど。

最後の結婚は１０年前でした。その時はタクシーの運転手をやっていて、その時のお客さんだったんです。彼女は中国人で、中国で幼稚園の先生をやっていたんですよね。結婚して子供も居たんですが、旦那が精神的におかしくなって、家を飛び出して何年も帰ってこないという状況になったんです。幼稚園の先生では子供と親を養えないので、日本に働きに来たんですよ。ところが行った先がすごい田舎にある工場で、給料が月に５万ぐらいだったらしいです。

技能研修生ってやつですか。

そういう感じだったと思いますね。５万円の給料も中国に送金すればそれなりのお金なんですが、実際には半年たたないと給料は渡されなくて、それまでは一ヶ月５千円しかくれないらしいんですよ。彼女はその５千円も貯めておいて、さらに一緒に働いている農家のおばあちゃんと知り合いになって、休みの日にはその農家を手伝って５千円ぐらいもらって、みんな中国に仕送りするような純粋な子だったんです。その彼女が田舎から出てきて、友だちを訪ねる時に僕のタクシーに乗ったんです。その時に身の上話を聞いて、こういうまじめないい子はなかなかいないなと思ったんです。それで電話番号を渡したのが縁です。

電話番号をＦさんから？

ええ。彼女も、今の仕事は安すぎるから他を探そうと思って上京したんです。それで知り合いが働いてたマッサージ屋に相談したらママさんが「うちで働けばいいじゃない」っていうことで、そこで働くようになったんだけど、今度はビザの問題があって、ぶっちゃけ日本で働き続けるためにはやっぱり日本人と結婚するのがいいかなあって。失踪した前の旦那とはもう離婚が成立してましたから。そんなときたまたま僕と出会ったんです。それからちょくちょく会うようになって、「好き」って言ってくれるようになったんです。僕も東京で営業していろんな国の人を乗せるから、韓国人だろうと中国人だろうとフィリピン人であろうとどんなタイプが居るのか全部わかってるつもりなんですよ。それだから、この子みたいなまじめタイプがめったに居ないのはわかるし、優しいし、好きなタイプだしね。「俺は一緒になりたいと思ってるけど、俺みたいに年とってもいいの」ってきいたら「いい」って言ってくれて。それで１０年前のクリスマスの日に、入籍したんです。僕が６０歳で彼女が３０歳でした。

いい話ですね。

狭いアパートでしたけど、二人で働いて、中国にいた彼女の

娘も呼び寄せたんです。でも６５歳を過ぎたころから僕も体調を崩してあまり働けなくなったんですね。そのころ、嫁も中国から来た若い女の子を世話していて、一緒に住むようになったんです。自分と同じ境遇だから見捨てられなかったんですね。そうなると一間しか無いアパートに女３人が居るわけですから、男の僕が居づらくなって「外で働いて仕送りするから」って言ってアパートを出ました。

　そのときは体調が良くなったらもっと働いて広いアパートを借りるつもりだったんですが、外に出たら体調がさらに悪化して、ガードマンで月に５～１０万円くらいしか稼げないんです。金があればネットカフェやサウナに泊まりますが、ない時は公園で野宿して、少しでもお金を家族に渡そうと頑張りました。

　そうこうしているうちに、中国から来た娘が・・明るくていい子なんだけど日本語が不自由だから、学校で差別やいじめがあるような感じで。だんだんおかしくなって引きこもりのようになってしまったんですよ。川崎にあった中国人の精神科のお医者さんに診てもらったら「ノイローゼだから中国に帰って中国の学校行く方がいいんじゃないか」って言われたんです。仕方ないから中国の祖父母の元に帰らせました。

　それと、嫁の永住権を入管に申請したんですが、何回申請しても１年のビザしかもらえないんですよ。やっと一昨年ぐらいに３年ビザがやっとおりたんだけど、永住権はおりない。僕と結婚したのに。書類に不備があるならちゃんと直すからと入管に言ったけど一切指示は無い。嫁はマッサージ、僕はガードマンをして、合わせて年収は３００万くらいあったんです。でも、公務員とか大きな会社で働いている人と結婚した嫁さんはすぐに永住権が下りるのに、僕らだといつまでも永住権が認められない。嫁は中国に帰した娘の下にもう一人息子がいて、その子供のことも気になるし、僕も身体が弱くなって仕事もあまりできなくて、家族揃ってこれからやっていこうと思っていたけど入管にいっても永住権の話が進まないし、旦那として家族を応援したいんだけど何もしてやれない。嫁もだんだん精神的に参ってきて、最後に二人で話し合って、離婚を決めました。嫁は子供と親の居る中国へ帰り、僕はもう７０過ぎたんで最後は国のお世話になろうと思って、生活保護を申請しました。それが去年の１１月です。

それで福祉事務所が紹介した「無料低額宿泊所」に入られたんですよね。どうでしたか？

　噂には聞いていましたが、ホントにビックリするような施設でした。

　外見は普通の一軒家です。その中の２０畳くらいの部屋に二段ベッドが７つ、８畳間に３つ。二段ベッドの上と下に一人ずつ入るから合計２０人が入ってるんです。二段ベッドの一段だけが自分のスペース。鍵のかかるロッカーなどないんで、入って一週間くらいでキャッシュカードと住基カードと現金の入った財布を盗まれました。こんなところで盗まれるなら入らなければ良かった。寮長に「他の利用者に盗まれた。調べてくれ」っていったんですが「うちにはそんな人はいない」って、まるで狂言扱い。交番に届けたけど、「家の中で起きたことは警察は関与できないから落とし物であったら伝えます」と。未だに出てこない。

それは酷いですね。それで、寮のご飯はどんな感じですか？

　飯は朝昼晩、寮長が作って出すんです。

それじゃ、寮長は大変ですね。

　いや、簡単なんですよ。給食で使うようなおかずをいくつも盛れるトレイがあるでしょ、そこに豆腐一丁を四つに切ったのと塩昆布・らっきょう漬けが少々。どんぶり飯と味噌汁はおかわりなし。たまに小さな納豆が付くくらいです。

普通、朝飯というとそれに海苔と卵じゃないですか？

そういうときもたまにあります。寮長も毎日決まったお金で作れと言われているんだろうから、お金が余った時なのかな。それでも原価はものすごく安いでしょ。なのに、この朝飯が１食４００円なんです。

ほう。食材費はいくらもかかってませんね。昼飯は？

昼飯は１食２８０円です。だいたい麺類ですね。５食１００円の安い中華麺があるでしょ、あれを寮長がスープの素かなんかで作った汁に入れて、トッピングはもやしかキャベツ。チャーシューやメンマなんてなくて、良くてなるとが１枚。

日曜の昼はいつも食パンの生１枚、袋入りのジャム１つ、それと紙パックのコーヒー１００円の奴が２人に１本。これって一人１００円かかってませんよね。

晩飯は６００円だから他よりはましです。魚とか肉に、他のおかずがちょっと付いて味噌汁とご飯。でも、食事の時間に１５分遅れるともう捨てられます。

私ね、こんな飯なら自分でコンビニとかで買った方が好きなものを選べるし栄養もあるからいいと思って、食べなかったんです。そしたら寮長が「食べても食べなくてもお金は頂きます」って言うんで「え、そんなこと聞いてないですよ」って反論したら「契約の時に口頭で話しました」って言うんです。

寮に払うのはその他にベッド代と光熱費と基本サービス料（生活相談・安否確認などの料金とされている）というのがあって、手元に残るのが１５０００円くらい。これが自分で使えるお金のすべてです。

１つの団体が１００人の人を寮に入れていれば、それだけで年間で売り上げが１億ですよ。税金が億の単位でそういうところに流れているのに、なんで役所はなにも考えないんだろうと思って義憤を感じます。

そんな寮に長期滞在している人もいるんですか？

います。３年いるって言った人は６０代でした。６年いるという人も。そういう人は毎日朝昼晩出された飯を食べて、寝るだけです。昼間はどこかで掛けてるみたいだけど、何してるのかは知りません。

仲良くなった人とか居ますか？

話す人はいますが仲良くなるまでは・・・　刑務所から出て、住むところがない人とか、自己中心的で会話ができない人や、歳取っていてふらふらしている人とか居て、トイレが間に合わずに廊下で漏らしちゃったのが２人。みんなで面倒見たけどどうしようもなくて寮長に言って老人の施設に移った人もいました。

アパートに行った人はいないんですか？

僕が居た３ヶ月の間では一人も居ません。

テレビはあるんですか？

テレビは食堂に１つ、ベッドの部屋に小さなテレビが１つです。チャンネル権は誰かが持ってるってわけじゃなくて、空いてれば見ていいんです。最初のころ食堂に誰も居なかったので

資料

①Ｆさんの生活保護費

生活扶助費	76730円
住宅扶助費	29900円
合計	**106630円**

②Ｆさんの宿泊所の料金　＊1ヶ月31日の場合

食費	１日1280円→31日で39680円
光熱水費	１日340円→31日で10540円
基本サービス料	１日400円→30日で12400円
ベッド代	１ヶ月29900円
月間の宿泊所利用料金合計	**92520円**

③差し引き　**14100円**

（１日当たり約455円）

テレビを見ていたら、寮長が「この人はテレビを独占している」って福祉事務所に報告したんですよ。僕から言わせれば誰も居ないから見てただけ。寮長だってずっと見ているわけじゃないのに。寮に入った人を管理しているだけで自立できるように支援して居るわけじゃないんです。

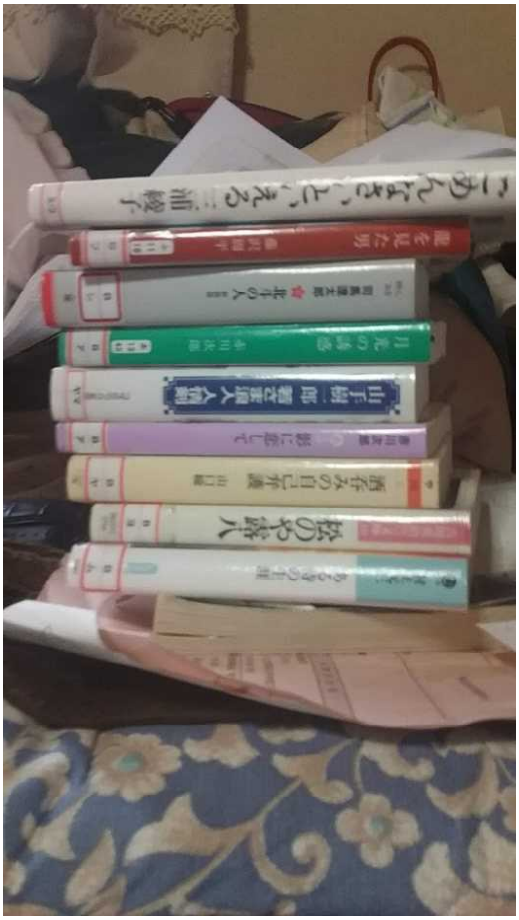
寮長ってどんな人ですか？

寮長は５０代ですね。寮に住み込みの部屋があってだいたい毎日います。なにか相談できる雰囲気の人ではないですね。でもそれまで結構苦労してて、家族は居ないと聞いています。

職員は他に居ないんですが、たまに他の寮から応援の人が来てました。６０歳くらいで、この人が作る飯はおいしいんです。気さくでいい人でした。話したら「他にももっといい仕事があるかもしれないし、給料も大して良くないけどやり出したから続けてる」って言ってました。でも、給料を普通にもらえたとしても、利用者のことを理解も支援もしないような仕事なんて、物事をちゃんと考える人にはまずつとまらないと思いますね。

その寮に3ヶ月居て，ＴＥＮＯＨＡＳＩのアパート（短期契約の仮住まい＝シェルター）に移られたわけですが、そのあたりの経緯をお願いします。

あの寮から早く出たい、アパートに行かせてくれと担当のケースワーカーに言ったんです。そしたら次はアパート生活ができるかどうか確かめるために更生施設というところに行ってもらいたいというので見学に行きました。そこは１００人も居る施設で、たまたま食事に行くところだったんですが、何十人もぞろぞろと列をなして歩いていて、なんだか刑務所みたいだなと。そこでは最初の三ヶ月は３人部屋で、その次が１人部屋。そこに何ヶ月も居させられるんじゃないかとイヤになりました。そういうときに、前から相談していたＴＥＮＯＨＡＳＩのアパートがもうすぐ空きそうだと清野さんから言われて、ケースワーカーに「あっちは普通のアパートだから同じ仮住まいならそっちに行きたい」って相談したんです。ケースワーカーは更生施設に行った方がいいってなかなかＯＫしてくれなかったんですが、最後は清野さんと一緒に話しにいって、役所で検討してようやくＯＫが出ました。



アパートは前の宿泊所と比べていかがですか？

全然違いますよ。自由があるから心のゆとりがあります。

近くに図書館があるんでここに来てから本をたくさん借りて読んでるんです。でも、学べば学ぶほど人生の悲哀を感じることも増えました。癒やされることのない苦しみを感じるようなことばかり。自分が生活保護を受けていることもそうだし、国のお金がああいう寮にどんどん流れていくのもそうだし、貧しい人が生活保護を受けてもそういう扱いを受けることもそうだし。

子供の頃、あんまり勉強はできなかったけど年取ってから世の中にはいろいろな学問があって、人間無知からは何も発生しないと思っていろいろな本を読むようになりました。最近は小説が多いです。人間の生と死・喜怒哀楽だけでなく宗教も大事だと思うようになって、教会に

行ったり、仏教を学んだり。でも宗教さえもそれを食い物にしたりしている人が居て、そうでないのはガンジーやマザーテレサみたいな一部のすばらしい人だけです。福祉の世界でも、良心的で無報酬に近い形で世の中の人に尽くしているＴＥＮＯＨＡＳＩみたいな道徳的にすばらしい人たちもいるけど、税金で肥え太るだけの業者もいる。

人生の行き詰まりまで来てどうしようも無いから役所に生活保護を申請する。ところがそのお金さえ昔ヤクザ屋さんがやっていたような、名目上は福祉団体と言うことになっている団体にみんな取られてしまう。自分も食堂やラーメン屋をやってきたからどのくらい儲かるかわかる。１００人とか抱えていたら大きな団体は億に達する金を税金から受け取っている。国民が汗と涙で稼いで納めた税金がそんなところに流れていることに対してどうして指導者たちが気が付かないのか。生活保護を受けている他の人でも、死ぬまでに別れた嫁さんや子供を探し出して、少しでもちゃんとしたことをしたいと思っている人もいるんです。だから、困っている人をちゃんと助ける仕組みになっていなくてお金がそういうところに流れていくことが悔しくて仕方がない。義憤を感じて胸が苦しいというか人生の悲哀を感じているんですよ。

たまたま自分はＴＥＮＯＨＡＳＩに巡り会って早めにこういう部屋に入れてもらったけれど、何年もそういう施設に住んでいる人たちを見ると、本気でこの仕組みを変えていくようないい人たちが現れないと日本の国は変わらないと思ってます。だからこうやっていろいろな人に話したり、駅で区議会議員の候補者に「本当に世の中のためにやっているなら、ホームレスの人が生活保護を受けて入る施設がこんな場所なんですけど、これをどう思いますか」って言ったこともあります。ＮＨＫのハートネットＴＶのインタビューも受けました。ある人から「ハートネットＴＶ見ました」っていわれて、私は出てなかったけど、すごく嬉しい気持ちになりましたね。これが埋没してしまうのでなく、本当に国が変わっていって欲しい。税金は国民の血と汗と涙、命と財産ですよ。それがああいうところに垂れ流されて無駄に使われていることを世の中に知ってもらいたい、そのために自分も一生懸命しゃべっているけどなかなわかってもらえない。

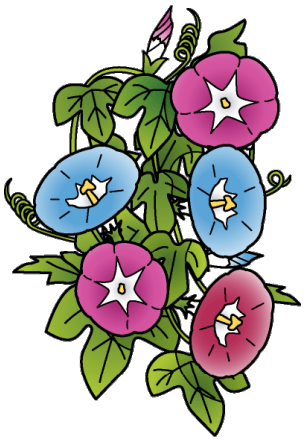
他にも福島で放射能に汚染されて家を追われた人がまた避難先の家を追い出されようとしている。国がそれに責任を感じているんでしょうか。

さらに、高校生や大学生が奨学金を借りてその返済のために何十年も苦労している。そのためのコンビニでバイトすれば「売り上げが悪いからコンビニの品物を自分で買え」とか「人手が足りないから授業を休んででもシフトに入れ」とか人に対する思いやりとか全くなくて、日本は世界で経済大国とかいわれているそうだけど全く暴力的で悲しい気持ちになるんですよ。話せば切りがないくらいあります。もっともっと話したい。

ありがとうございます。ではこれからどういうことをしたいですか？

いま生活保護を受けて半年になりますが、その間にも身体の衰えが激しい。早く部屋を構えて働きたい。もうあんまり働けないけれど、１万でも２万でも自分で収入を得たいです。

そして残り少ない人生ですから残った時間はボランティアとかして、最後まで世の中に貢献したい。いま、都内にたくさん空き家があって、それを福祉関係で活用して困っている人を入れるようなことをしたいです。ＴＥＮＯＨＡＳＩにいろいろ教えてもらって。国の金を無駄に流すのではなくて、本当に役に立つ使い方にして欲しいです。



その人らしさを取り戻していくために必要なのは、安心して一息つける場所。「あの人が悪い」という偏見を乗り越えて。

TENOHASI事務局長　清野賢司インタビュー

2019年4月10日

「『今夜、行き場のない人』を路頭に迷わせないため、団体の枠を越えた基金を作りたい！」をスローガンに始まった「東京アンブレラ基金」。

「アンブレラ基金」はTENOHASIと、難民、セクシャルマイノリティ、子ども、若者、人身取引被害者、原発事故避難者などの支援団体が共同で行っています。

クラウドファンディングサイトの「活動報告」に各団体の代表者のインタビューが掲載されています。私もインタビューしてもらったのですが、出来上がってきた原稿が活動の紹介だけでなくTENOHASIの歴史を深いところで捉えてとてもよかったので、ライター原田詩織さんの許可を得て転載します。

夜の池袋、雑踏の隅でうずくまっている男性がいる。その男性に向かって一直線に近づき、

「こんばんは、最近どうですか？」

と声をかけたのは、NPO法人TENOHASI事務局長の清野賢司さんだ。

清野さんが話しかけた男性に、今夜眠るための家はない。清野さんは男性の近況について話を聞き、体調を気遣い、おにぎりを渡す。会話の中で、少なくとも今日はここから動きたくないことを聞くと

「また来ます」

と言って、再び歩き出す。

清野さんがTENOHASIと出会ったのは、中学校で社会科の教員として勤めている時だった。2002年、中学生がホームレス状態の男性を襲撃し、殺害する事件が起こった。

加害者は清野さんが前の勤務校の隣の学校の生徒で、その学校のことを清野さんはよく知っていた。当時、とてもショックを受けたと清野さんは語る。

「この事件は、自分の受け持っている生徒がやってもおかしくなかった。とても他人事には思えませんでした。

それと同時に『考えてみればホームレスの問題って授業でやったことなかったな』ということと気づきました。

明らかに周囲から蔑まされている特定の集団がいる。偉い人がその人を蔑んだ言葉を言っても問題視されない。教育現場でも取り扱うべき教育課題だと思っていない。それが普通と思って誰も疑問に思わない。

これって、差別という現象の本質だなと思ったんですよね。私自身もそれまで差別問題は意識的に授業の中で取り扱ってきたのに、この問題だけはやったことがない。ここに私も含めた

差別の最前線がある。ぜひとも授業で取り上げなければと思いました」

ホームレス問題について授業で取り上げるために、清野さん自身も勉強をするなかでＴＥＮＯＨＡＳＩのことを知り活動に参加し始めた。

それ以前にも、差別問題を授業内でたびたび取り上げていたという清野さん。差別問題について関心を持ち始めたのは小中学生の時だったという。

「小中の頃、本は好きだったんだけど、特にドキュメンタリー、人々の息遣いが聞こえて来るようなものが好きでした。

その中でも、水俣病が衝撃的で、こうやって公害が発生し、それを会社や政府がここまでひた隠しにするのかと。そして、その隠蔽や不正に対して戦う人がいて……。

思い返すと、自分の国にこういう不正があって現在進行形なんだってことを知ったのが、その時でした」

大学時代には、在日韓国・朝鮮人への差別についても当事者と共に活動をした。

学生時代に、社会の不合理と、そこで戦う人々の存在を知った経験が、社会に対する眼差しを培った。

そして現在、その眼差しはホームレス問題へ向けられる。

「２０００年頃、日本に貧困はないとされていました。

だから、ホームレスはなまけもので、臭くて汚い。昼間から酒飲んでて良い身分だと言われてきました。

ホームレス状態の方に障害があるとか、福祉の施策が不十分であるとは知られてなかったし、行政の違法な対応で生活保護を受けさせて貰えない人がいても誰も疑問に思わない。

その頃、新宿区だったら毎週一人が路上で死んでいました。豊島区でも月に２人は路上で死んでいました。『一体どこの国なんだ！』というようなひどい状況が、それほど報道されない」

「ハッと思ったんですよね。中学生が障害児を襲ったら教育委員会がひっくりかえるくらいの大問題になるよなと。それなのに、ホームレスだったらそこまで問題にならない。

学校も真剣に取り組まない。教員も含めて、偏見を持っているから。

何故それをしちゃいけないのかって根拠がないんですよね。しっかりした答えが教員の中にないから『命の大切さ』を説くしかない。

けど本音は『あいつらが悪いんだ』って思ってしまっている」

ハウジングファーストの実践

この現状を変えようと奔走しているのが、清野さんが事務局長を勤めるＴＥＮＯＨＡＳＩをはじめとしたホームレス状態の方に対する支援団体だ。

そして現在、ＴＥＮＯＨＡＳＩが支援指針のひとつに掲げて

いるのが「ハウジングファースト」という考え方だ。

「ハウジングファースト」とは、何らかの理由で住まいを喪失した生活困窮者に対して、まず安定した住居を提供し、そこを拠点に生活の確立を行っていく支援方法だ。

従来の福祉制度では、ホームレス状態から生活保護を申請すると、アパートで一人暮らしできるかどうかの審査が行われる。その審査のために簡易的な宿泊施設（いわゆる無料低額宿泊所）への入所がすすめられる。その施設のほとんどは個室ではなく、一部屋に複数人という環境での生活を余儀なくされる。

しかし、清野さんによると、ホームレス状態を経験された方々にとって、何より優先すべきはプライバシーだという。仕事や住まいを失い、路上での生活を余儀なくされてきた人たちは心身ともに疲れて、ストレス耐性も弱まっているからだ。

だがその一方で、それまで住み込みの寮などを転々としてきてアパート暮らしを経験したことがない人にとって、いざプライバシーが確保されると安心と同時に孤独や不安を感じ、環境の変化に馴染めない場合もある。

そのため、それまで一人暮らしを切望していても、アパートでの一人暮らしから再び路上生活に戻ってしまう人もいる。

これを防ぐため、清野さんをはじめＴＥＮＯＨＡＳＩのスタッフがその人その人に合わせて、ほぼ毎日だったり週一程度だったりと頻度を柔軟に変えて、定期的にアパートの訪問をおこなっている。

別にその人が話好きというわけでもなくても、顔を見て話をする。一言、二言でいい。その積み重ねが重要なのだ。「現在、協働している団体や大家さんの協力を得て、豊島区とその周辺区で約２０室のアパートへを確保しています」

都内にある某無料低額宿泊所。
一人のスペースはベッドの一段だけ
写真　”探偵 file”

シェルター運営の試行錯誤

清野さんは淡々とシェルターの支援について語る。

「最初は１０年前です。健康状態が悪化して緊急性の高い方を事務所で一時的に保護したことから始まりました。それまでも泊まれるところがあればと必要性は感じていました。ただ、小さい団体なので、それまで宿泊出来る場所を持っていなかったんです」

「最初に入った方は、その晩にたまたま出会って、泊まるとこがないって人でしたね。ほんとボロボロでね、真冬だったから野宿してもらうのも可哀想だと。じゃあうちの事務所に泊まれるけど来ますかっていったら喜んで来てくれたんですね。そういう人が２人、３人とあらわれて、ワンルームの事務所に雑魚寝というかドミトリー形式で寝るようになったのがはじまりでした。それが２００９年で、そこからシェルター運営の第一歩を踏み出しました」

まずは、ドミトリー形式から始まったＴＥＮＯＨＡＳＩのシェルター運営。その後シェアハウス型のシェルター運営にも挑戦するが、そこで集団生活の難しさと直面する。

「雑魚寝は辛いという声が大きくなり、次にシェアハウス型シェルター（個室だがトイレ・リビング・風呂は共同）を２０１４年から始めました。

いざやってみると、確かにおしゃべりが好きでコミュニケーション好きな人にはいいんだけど、『共同生活だと他人がずっといるから気が休まらない』といってシェルターを出る人もいたんです。

だったら完全個室型の、要するに普通のアパートを使ったシェルターをやっていこうというふうに２０１６年から方向転換をしました」

私たちにとって、当たり前である「自分の時間」、「自分の空間」。路上に放り出されると、その当たり前のものが一瞬でなくなる。通行人から暴行されないか、物を盗られないか常に警戒し、冬になれば凍死の危険性もある。

それでは、その生活を逃れるため生活保護を申請し、施設に入所すれば一件落着だろうか？ほとんどの場合、相部屋の集団生活しか選択肢は無く、施設に帰っても自分だけの空間はない。常に人に気を使い、ほっと一息つける瞬間はいつだろう。

「屋根があるんだからいいじゃないか」、そんな意見もあるかもしれないが、思い出して欲しい。あなたが何もかもに疲れても、自分の家に帰ってきた時の安堵感を。

辛いことがあった夜、さっさと忘れるために潜り込む自分の布団のあたたかさを。それを望むことは路上生活に追い込まれた人間にとって不相応なのだろうか。

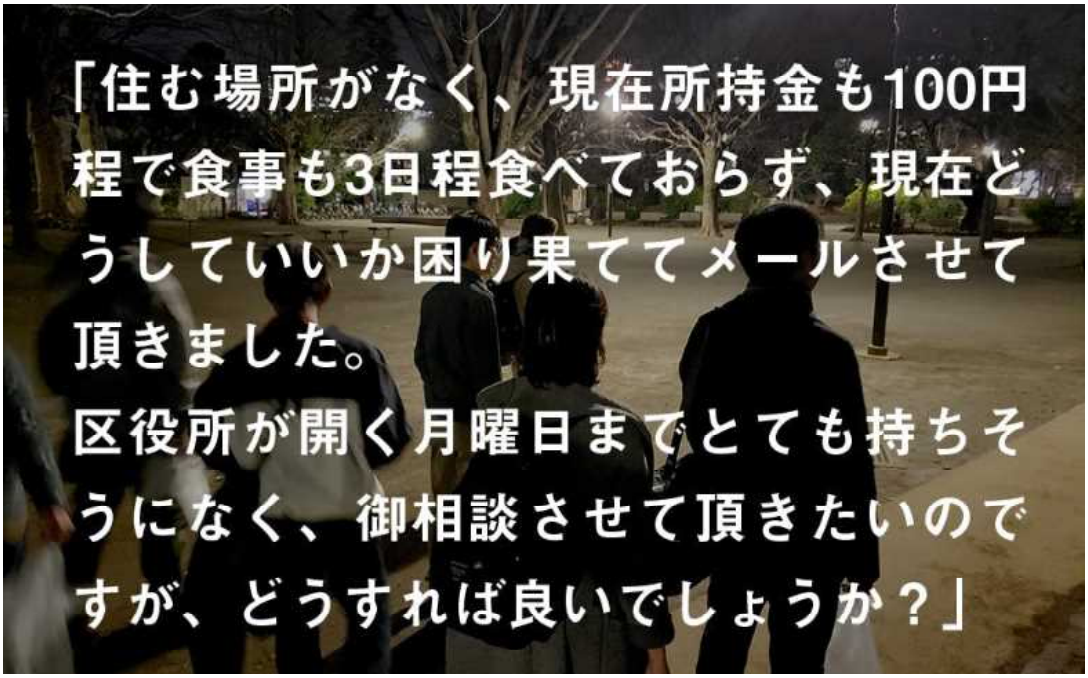
緊急宿泊支援が足りない！

一方でＴＥＮＯＨＡＳＩや協力団体が用意している個室シェルターに入居できる人はまだまだ少ない。

さらに緊急を要するのが、すぐにでも身の安全を確保する必要がある障害者や健康状態の悪い生活困窮者である。

清野さんによると、路上に寝泊まりしている生活困窮者で、生活保護等を利用したいと相談に来たけれど、申請までの宿泊費や食費を持ち合わせていない人に、緊急宿泊費としてネットカフェ代や食費を渡している。

現状として、緊急宿泊費は生活支援費の予算２００万から捻出されている。２００万のうち、緊急宿泊費に充てられるのはせいぜい５０万円程度だ。



緊急宿泊費が必要となるのは、月にだいたい５～８人程度。ネカフェ一泊だったら三千円で済むが、土曜日に相談に来た人には役所が開く月曜日までの二泊

分必要だ。そして、年末年始には人が増えるので、さらにコストがかかる。

「ほんとはね、野宿で疲れてるから役所に行く前にシャワーくらいあびて、暖かいところでゆっくり寝て、ご飯もしっかり食べてから申請に行けるようにしてあげたいんです。

けど予算には限りがありますので、冬の夜で凍死の危険があるとか、病気があって野宿では命の危険があるような人には宿泊費を出しますが、春や夏場・病気ではない方にはとりあえず野宿のまま頑張ってもらうしかない。忍びないですが」

清野さんの願いは切実だ。寄付や助成金で集められた予算の中、清野さん自身に最低限の給料らしい給料が支払えるようになったのも最近だ。それまではほぼ無給だったという。

それでも、シェルター運営や、緊急宿泊費の補助といった活動は、日本を変えていくためにも必要だと言う清野さんの言葉は力強い。

「いまの、路上で生活されている人々のバックグラウンドはあまりにも複雑。心身の障害や依存性、家庭環境など個々のケースが様々。いまの福祉制度のキャパシティを超えています。

だからこそ、私たち民間が制度にないことを実験的にやっていって、その経験を積んで、世の中に『こういうことやったほうがいいですよ』と広く伝えるということをやろうとしているわけです」。

「先ほどお話しした通り、現在は家がない人が生活保護を申請したら、ほとんどの場合、集団生活の施設に入るんです。一部屋に二人とか二十人とかで共同生活をするんですよね。それが当たり前とされているけれど、それっておかしいですよね、と。希望する人には個室を提供し、安心して心と体を癒し、そこから自分らしい生活を作っていく。そのような新しい自立のモデルケースとなれたらと考えています」

私たちも福祉制度を変えられる

さらに、今後支援活動を広げるためのパーツも揃ってきた。

長年の支援活動を通して、住宅、医療（クリニック、訪問介護）は、池袋内のネットワークで独自に発展してきた。

さらに、２０１９年の４月から運用が始まる、ＴＥＮＯＨＡＳＩを含めた８団体が協働して緊急宿泊費の助成をおこなう「東京アンブレラ基金」のように、より広範な、様々な社会問題と向き合う支援団体が共通の問題を対処するため連携も始めた。

相互に補い合い、それぞれのフィールドで培ったものを組み合わせて制度に訴えかけていく段階がやってきたのだ。

清野さんは語る。

「弟は自閉症です。うちの弟が小さい頃、障害者が働く作業所は親達が手弁当で作って職員を雇ってやってたんです。

それがいまや全国各地に障害者のための就労支援事業所や就労移行支援事業所がありますよね。時代は変わったなと思います。

昔は障害者は家にいるしかない時代で、その介護は家庭内に留まっていました。でも本人・保護者・支援者がさまざまな活動の結果、国がきちんと障害者の就労の場を保証する仕組みが整ってきたんです。

それだったら、次は私たちも福祉制度を変えられると思うんです」

ＴＥＮＯＨＡＳＩが活動を開始して２０年近くたった。一人一人の社会に対する違和感が、日本の福祉を変える日も近い。

【取材・執筆】 原田詩織
都内の私立大学四年生。有限会社ビッグイシュー日本東京事務所と、ビッグイシュー基金で計1年間のインターンを経験。現在、ビッグイシュー日本アルバイト、つくろい東京ファンドボランティア。

【一部修正】 清野賢司

物資のカンパありがとうございました

TENOHASIは、みなさまに支えられています

敬称略・順不同　２０１８年１１月１日～２０１９年４月３１日

物資の寄付を頂いた方のうち匿名希望の方を除いた約二百名の方々のお名前を掲載させていただきましたが、ＷＥＢ版では個人情報保護のため削除させていただきました。

お詫び

紙数の関係で、資金カンパを下さった方のお名前は次号にまとめて掲載致します。申し訳ありません。

多くの匿名の皆さま

お知らせ

前号から会報誌のweb版をホームページにアップしています。
＊個人情報保護のためweb版では「カンパありがとうございました」は削除しています。
「今後、紙の会報誌は不要」という方は、お手数ですがホームページの「お問い合わせフォーム」からのメールや、電話等でご連絡ください。
＊会報誌を出したらメーリングリストやブログ・ツイッター・フェイスブックでお知らせします。

□TENOHASIの活動

○炊き出し＆医療生活相談＆鍼灸マッサージ＆お茶会
毎月第２/第４土曜日　東池袋中央公園
○おにぎり配布と夜回り　毎週水曜日　池袋駅前公園～池袋駅とその周辺
○ハウジングファースト東京プロジェクト　路上脱出支援・安定した地域生活への移行支援
参加：TENOHASI・世界の医療団・べてぶくろ・あさやけベーカリー
訪問看護ステーションＫＡＺＯＣ・つくろい東京ファンド
ＳＷＯＣ/ゆうりんクリニック・Habitat For Humanity・BaseCamp

□　活動資金のカンパをおねがいします！

郵便振替　00１90-8-２５9686　特定非営利活動法人ＴＥＮＯＨＡＳＩ
銀行振込　ゆうちょ銀行　０１９(ｾﾞﾛｲﾁｷｭｳ)支店　当座２５9686　トクヒ）テノハシ
クレジットカード決済　ホームページからお願いします。

□　物資カンパも大募集中！！

衣類（季節にあったもの。スーツや女性ものは不要）・靴・毛布・カミソリなど
食材（米・缶詰・レトルト食品など。）　＊送り先：下の「発送元」らん参照↓

□　寄付・ボランティアのお問い合わせ

メール：TENOHASIホームページの「お問い合わせ」から
電　話：090-1611-1970(事務局長　清野賢司)

特定非営利活動法人TENOHASI
会報第３９号　2019/6/15発行
□ホームページ　http://tenohasi.org/
□メール　tenohasi@yahoo.co.jp
□facebook　https://www.facebook.com/tenohasi/
□twitter　https://twitter.com/tenohasi

印刷　アビーム(社会福祉法人復生あせび会)

発送元

〒177-0045
練馬区石神井台6-1-28
TENOHASI事務局
TEL 090-1611-1970